

長野県小布施町の高井鴻山記念館の改修工事については、会報『伝統技法 N036 号』で紹介しています。この工事の中で張付壁の張り替えを行ったところ、私達がこれまでに実物を見たことがなかった下地の状況がわかりました。

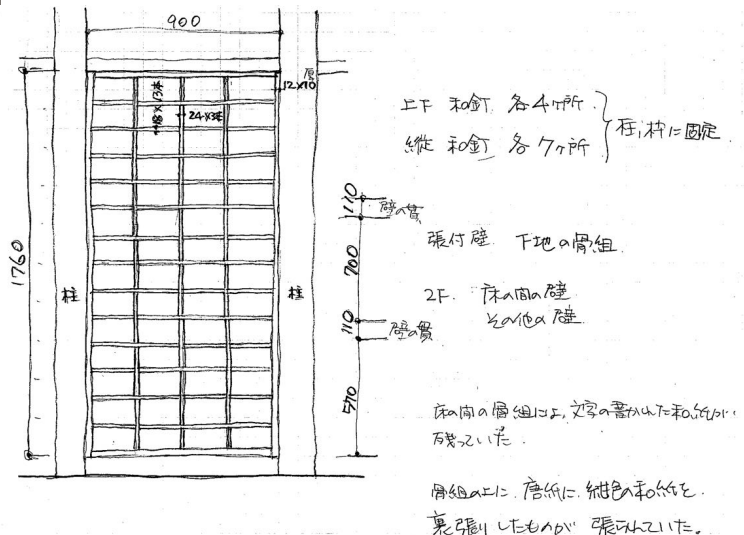
憮然樓は、幕末に建てられた鴻山が住んでいた建物で、主要な壁は唐紙を張って周囲に押縁を廻した張付壁でした。現状の唐紙は、昭和 58 年（1983）に記念館として整備した時に張り替えたもので、押縁も 4 分（12 mm）角の杉の白木で隅の交点は突き付であることから、下地から作り替えていると思われました。

既存の壁紙を剥がしてみると、復古紙を用いた骨縛りの上に近年使われている紫色の薄紙が張られており、前回の工事では骨縛りから下は手を付けていないことがわかりました。復古紙の下には、襖の下地骨と同じ格子組みが、両側の柱に 7 本ずつ、付鴨居と畳寄に 4 本ずつ和釘で打たれていました。和釘は、地域によって差はありますが、東京周辺では明治 20 年代前半まで使われていましたが、その後現在のような洋釘に変わっています。長野周辺の状況や建具職人がいつ頃まで和釘を使っていたかわかりませんが、格子の下の壁は荒壁のままで貫も見えていることから、建設当初の仕様と考えられます。

格子は内法 1760 mm と柱間 900 mm の間に隙間無く収まり、縦方向は縦框が見付 12 mm で、



荒壁と貫の前面に、張付壁の下地の格子組が上下各 4 本、縦各 7 本、和釘で打ち付けられていた



張付壁の下地骨の野張
格子の見付は縦 24 mm、横 18 mm、外枠は 12 mm で、縦横は裏表交互に組まれていた

内部を4当分して見付 24 mmの力骨を3本
いれ、横方向は上下の框の中を14当分して
見付 18 mmの中骨を13本配していました。

これまで見てきた張付壁の下地は、木摺
を枱形や縦、横に張ったもので、この格子
組の下地は初めての経験でしたが、東京松
屋の川島氏によると、この下地の方が一般
的に用いられているとのことでした。

今回の張替えに際しては、高い技術をも
つ上田市の清蘭堂が担ってくれました。縦
框の見付が12 mmと細いので、きちんと張れ
るのか心配しましたが、骨縛りの上にベタ
張りした表面は、和紙が板のようにピンと
張った状態で、これなら剥がれないという
安心感を覚えました。

下張りには、兵庫産の和紙を使用し、骨
縛りとべた張りは厚い 30 g、袋張りは 15
gを使い、袋張りは2方向を食い裂きとし
ました。紙の大きさは、骨縛りとべた張り
は470×620 mm、袋張りは310×470 mmです。
骨縛りは紙を縦に張り、べた張りは紙を横
に張り、継目が井桁になるようにしました。
袋張りは壁面の端から約 30 mm内側から張
り始めるので、表紙の周辺はべた張りの上
に直接張られることとなります。

表紙は周囲に固い糊を叩き付けるように
塗り、その中は刷毛が軽く動く程柔らかい
糊を塗ります。糊の固さは解く水の量で調
整します。張る時には、糊が塗られた表紙
の上端を持って軽く押し当て、兎の毛の厚
さ 3 cm程の白刷毛で全体を広げるように素
早く表紙全体を下地の袋張りに押し当てま
す。次に、長さ 30 cm程の薄い竹ベラを滑ら

せて四辺をしっかりと押えませんが、この状
態の表紙は壁面より大きいので、マスキ
ングテープとして柱のチリ面に貼られた和紙
の上に被った状態です。仕上げは、厚さ 6
mmの合板を定木にしてチリ面に表紙を 6 mm
残して切り取りますが、押縁で隠れます。

糊は正麩糊で、固形の正麩を水に浸けて
一晩おいたものを煮て使いましたが、防腐
剤が入っていないので、何もしないと1週
間程でカビが生えるとのこと。糊を煮
て5~10年寝かせておく古糊は、掛軸や腰
張り等には使いますが、壁紙等に使う糊は
作り立ての強い糊を使います。掛軸や腰
張りに古糊が使われるのは、張り替えられ
るように粘着が弱いのと、糊が強いと下の汚
れを引っ張って表面にでてしまうからだそ
うです。



和釘は格子を外す時の為に頭を打ち残している。



木摺を縦横に市松に配した喜翁閣の張付壁の下地